慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介（二）『〔恋塚物語〕』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2007
Jtitle	三田國文 No.46 (2007. 12) ,p.43- 54
JaLC DOI	10.14991/002.20071200-0043
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20071200-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵「道書類」の紹介（二）
『〔恋塚物語〕』翻刻・略解題

恋田知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『〔恋塚物語〕』を紹介する。本書については、外題・内題ともに記されておらず、奥書なども有していない。前号においても述べたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間（一五九六―一六二四）の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、本書についても、おそらく同じ時期に書写されたものと推察される。[1]

本書は、『平家物語』読み本系に見られる文覚発心譚に基づくお伽草子『恋塚物語』の一伝本である。『恋塚物語』については、明暦頃の絵入り刊本と、高山市歓喜寺に蔵される、寛永年間（一六二四―二九）頃の写しで『滝口物語』と題される写本の二系統が知られている。本書は、故事説話を多用する点や渡辺の橋供養の際一目ぼれした盛遠が火事騒ぎに紛れて女を見失ってしまう点では刊本との類似性が指摘できる。一方、女主人公に名前が与えられていない点や夫の左衛門が女の死後「もんしやうはう」と改名する点など、歓喜寺本との共通点があげられ、両系統それぞれとの関連が推察されるものの、より後者に近いと判断される。ただし、簡素な本文の歓喜寺本に比して、冒頭に著名な恋愛説話を列挙するなど、独自の記事も多く見られ、現存伝本のなかでも最古写にして最古態と推察されることから、きわめて貴重な伝本として位置づけられる。なお、詳細については、別稿にて検討したので参照されたい。[2] 書誌については、以下のとおりである。

・函架番号　近ト―七二―ワ
・形態　写本。一冊。仮綴じ。
・寸法　縦二八・一糎。横二一・二糎。
・表紙　本文表紙共紙。楮交じり斐紙。左肩打付墨書「いりさまの御ほん」との小書き（本文と別筆）あり。
・丁数　墨付二十九丁。
・本文　半葉九行。漢字平仮名交じり。字高二三糎。
・内題　なし。
・奥書　なし。
・印記　一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。

翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打つなど、読解の便宜をはかった。

注

（1）陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、前号掲載の翻刻紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐって―」（『唱導文学研究』第六集　三弥井書店　二〇〇八年）、拙稿「説法・法談のヲコ絵―『幻中草打画』の諸本―」（『仏と女の室町　物語草子論』笠間書院　二〇〇八年）を参照されたい。

（2）拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子―『恋塚物語』をめぐって―」（徳田和夫氏編『お伽草子　百花繚乱』笠間書院　二〇〇八年刊行予定）。

【附記】

本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜りました、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げます。また、本書の翻刻・考察に際しまして、御教示賜りました、陽明文庫文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げます。

なお、本稿は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部です。

【翻刻】

それ、よくしきむしき三かひのうち、たいらんしつ
けのしやうのあひた、しやうしてはしゝ、ししてはしやう
し、いつれのしやうをかうけさりける。されは、われら
たま〳〵三あくしゆのほうをまぬかれて、さいはひに
にんけんのみをうけ、まれにふつほうるふのときにあ
へり。よろししやうしけたつのみちをももとむへし。
一たひけうしゆも、もつはらこれをいましめたまふ
事、さいしよよりおはりにいたるまて、三こくのそし
もともにこれをおしへたまふ。およそれんほのかゝみ」（1オ）
のうへに、かけをならふるもはせをのはのやふれ
さるほと、ゑんわうのふすまのしたにあそひたわ
ふるゝも、草露のいのちのきえさるほとなり。す
へて女人はとんあひのまうねんたり。このゆへに、一
ねん五百しやうけんねんむりやうこうととく。なんし
は女人のためにして、とくたうをさまたけ、によにん
はなんしのゑんにして、しやうしをとゝこふるとかや。
しかれは、てんちくのしゆつはかは、きさきをこひて
ほむらとなり、わかてうのきそうしやう、恋ゆゑあを」（1ウ）
きおにとなる。たいとうの一きやうあしやりは、やうき
ひになをたつて、くわうこくへなかされけり。ほんてう
のしかてらの上人は、京こくのみやすところをわり
なく恋たてまつりてこそ、御てはかりをたまはり、しん
やうのひわのあるしは、むなしき舟をのみまほる、
松浦ののゐしのすかたは、もろこし舟をしたひけり。
そうきよくを恋し、おんないへたてのかへによりて、
三とせかうちにはかなくなり、ゑんあんといひしおん
ないちやうしやうしよにあひおくれ、ゑんしろうの」（2オ）
さうけつのよのなかきに、夜もすからなきかな
しみて、なれしころもをひきかさね、わかみにふれ

けれとも、そのうつりかのなきまゝに、むなしき月
日をうらみつゝ、十二の秋をおくりて、つゐにはかなく
なりにけり。すかたありさま人にこへ、ことさら色を
このみつゝ、なさけをもらさゝりしかは、女房の心
をかけぬ事もなし。かのかうわうのきさきにそく
てんくわうくうと申は、あまたのなかにすくれて
御心もはなめき給へは、くもゐの月かけをほのかに」（2ウ）
見たてまつりて、心そらになりけり。一かたならぬもの
おもひ、おつるなみたのたまくしけ、あけくれなけきし
つめとも、そのかひなきをかなしみ、身をかき草のね
をたへて、さそふ水をまつほとに、たくひなかりしあわ
れさは、いはのしつくや見えにけん。こゝろのうちにし
られて、さこそはおほしけれとも、たやすき御事なら
ねは、なくさめ給ふ事なくて、うちすきたまひける
ほとに、いかなるひまやありにけん、ゆめみるほとの御ち
きりなか〳〵よしなかりける。たかひにいひてしのへ」（3オ）
とも、くものかけはしとたへして、ふみかよふへき道
もなし。なを人しれぬものおもひ、とりかさねたる
こゝちして、ものやおもふといふ人もなくて、月日をふる
ほとに、いうせんくつといふふみに、おもひの色をあらは
して、きさきにたてまつる、ありかたくそおほえける。あ
るひは、りうしんのかたちをかんせんてんのかへにうつし、
やうきひのすかたをはほうらいきうにたつねゆく。とし
に一たひあひみしは、そとおりひめのいにしへ七夕つめも
ためしあり。空こそなかめられけれはまつよむなしき」（3ウ）
おり〳〵は、月に袖をかたしくうちのはしひめなるか
や。そうしの字をあらわすは、くわんせうといへる物と
かや。さるさわのいけにしつみて、いくたのかわに身をな
け、そこのみくつとなりしは、よしなき恋のゆへとなり。
しやうほのたけをそめしは、恋ゆゑなかすなみたなり。
なみたにそめしたもとこそ忍ふすりともなりしか。
ちつかにたてしにしきゝは、もゝよのしちのはしかき
のさわへにせりをつみし人、ゆめうつゝともわかさりし
はいせのいつきのみやとかや、あかぬわかれは物ならて
」（4オ）
ふけゆくかねをうらみつゝ、あさまのたけふしのねた
えぬおもひのけふりたち、よしなしとはおもへとも、か
くてこれをあんするに、ふつほうにきするかたより
なり。あひへつなけきよりおこりて、ほたひをもと
むるゑんとなり、れんほのかなしみにありとかや。かや
しやうの月かけ、せんたんのけふりにかくれつゝ、しゆふ
うせんの日のひかり、さうしゆのえたにいりぬれは、かしや
うあなんとうのしやうもんは、なみたをなかしひれふし、
みろくもんしゆとうの大師は、かうへをうなたれて」（4ウ）
たんそくす。しまわうこんのそんようを、二たひ見たて
まつらす。かれうひんの御こゑを、又きく事もなけ
れは、しふのしゆもこと〳〵く、てんにあふき、ちにふし、
なきかなしみけるとかや。およそしよきやうのいまし
めはのかるゝところなけれとも、けんかいゑれんほにし
やうかつかうしん、たのもしくこそおほへける。しかれは、

みかわの入道しやくせうは、あしやうれんほのなけきより、うきよをのかれんかためにこそ、しやうりやうせんにもいりたりける。たまつしまの明神は恋ゆへかみとあらはれ」（5オ）

あしから山のしんめいは、こひせはやせぬへしやとうらみ給ひけるとかや。みわのやしろのすきのかと、すみよしのきしのかたそき、かしまの明神はかたむすひなるちきりをうらみ給ひて、かものかわせにせゝみそき、恋せしといふことをは神さへうけぬ事もあり。なりひらのちうしやうは、大日のけしんなりしかは、二生かひのあひたに三千よにんにあひなれ、おのゝこまちはかたしけなく、くわんおんのけしんなりしかとも、しよにんの心をなやませり。そも〳〵こんちの（ママ）ゐんの」（5ウ）

御とき、ゐんたうむしやとをふさは、わたのへたうなりけるか、とをふさかそくなんに、ゐんたうたきくちもりとをときこえしは、すかたありさま人にこえ、なまめきすける心まて、いちはやかりし人なれは、なをきゝかたちを見る人はみな、あひねんをおこしけり。しちくりよりつのさひかくも、たけくいさめるこゝろまて、人にそすくれたりける。しかるに、すきにしきうあん六年五月十八日、津のくにわたのへの橋のくやうありしとき、ゐんよりふきやうをくたさるゝ」（6オ）

國のあんなひしやたるうへ、ゆゝしきさいしんなれはとて、しやうねん十八に彼もりとをゝくたさるゝ。しかれは、かしこへくたるに、なにはいりゐの事なれは、あしの上葉をわたる風、みきわになひくしらなみの、よるにやかてなりぬれは、ふりすさみたるさみたれの、くものまよひの月見えて、しほ路にあさるあしたつの、月かたふけはくちすさみ、やそしまかけてこく舟の、あとのしらなみかつきえて、山ほとゝきすの一こゑ、をりにふれたるあわれさに、笛うちふきて」（6ウ）

たゝすめは、さらはみちとをくして、あしへをさしてこく舟に、つまをとよしある琴のねの、まつふくかせにたくへて、ほのかにきこえけるほとに、もりとを笛をふきさして、いかなる人のひくやらん、はくらくてんのいにしへ、江上のひわのねをたんする人ととひけるも、いまこそおもひしられける。いつくをさしてゆくやらん。こゝろもとなく見るほとに、こきつらねたるとも舟の、あひちかくにしたかひて、はしのつめにつきにける。もりとをすこしたちよりて、い」（7オ）

かなる舟のうちなると、あまたのなかを見るほとに、女房おほくとりのりて、よしあるさまの舟なれは、あわれいかなる人やらん、かたちを見はやとまちしかと、月かけにしに入ぬれは、空おそろしきさつきやみ、さしもみしかきなつのよのあくるをまつこそひさしけれ。やう〳〵その夜もあけゆけは、ふねのうちの女房、こしさしよせてのるほとに、いまこそ見るへきときなれと、うかゝひたちよれとも、きちやうのかけよりのりしかは、まちつるかひもなくしてにう」（7ウ）

はうさしきに入にけり。ともの女房十二人をの〳〵

つまをとゝのへて、ゆゝしきさまなりしかは、人々
めをおとろかす。もりとを心あくかれて、物のふきやう
をさしをき、きさきをとにかくうかゝひたつそよし
はなき、しかるへき事にや、なにはいり江のうら
かせに、すたれのひまそあきたりける。そのうちに
見てあれは、二八にあまりてはたちにたらぬほと
なるか、ふようのまなしりこひありて、りうはつかせ
にみたれて、あをやきのいとはつかしきふせひな　」（8オ）
り。そのすかたたえにして、かたちゆふなるありさまは
あきのはらのをみなめし、そのうのなしの一えたに、
雨こそそゝきけるとかや、はむあんしんかはゝかた
のめい、さひきけひかをといもうとゝもいひつへし。
けんしの物かたりには、によさんのみやのきんをしら
めたまひしは、きさらきのあまりの青柳のはつかに
したりそめけるを、うくひすのはかせにもみたれ
ぬへしとたとへられ、をのゝこまちかかたちをは、やう
きひりふしんにもたとへらる、さしきのうちのあるし」（8ウ）
をはたとへをとるに物そなきと、おもひつゝけてたゝ
すめは、をもはゆけなるけしきにて、たもとをかさしに
けるそはよりすたれをひきなをす。そのゝち、又も
みえされは、夢にもしらぬみちのくの忍ふの山にふみ
まよふ、こゝろのうちのみたれは、さこそとおもひしられ
ける。さいこちうちやうなりひらの、うこんのはゝのひ
おりの日、むかへにたてるをんなくるまのしたすたれ
のひまより、ほのかに人を見そめしかは、みすもあ
らす、見もせぬ人をとなけきしも、かくやと　」（9オ）
思ひしられて、やう〳〵くやうもはてぬれは、さしき
よりもたたんところを、もし一めもや見るとて、う
かゝひてたちけるほとに、そのへんちかきさいけ
に、にわかにくわさひ出きて、しやうけひしめくその後に、
ゆきかたしらすなりにける。ふなつのかたを見け
れは、舟もあらすとこたへける。はしのひしりにとは
するに、さやうの御舟はみやこをさしてといひけれは、
もりとをみやこにのほりける。わかしゆくしよにはつ
きしかと、一夜をたにもあかしかねうはの空にそあく」（9ウ）
かるゝ、たえぬ思ひをしるへにて、らくやうへんとを
れいふつれいしやをかみても、あひみんことをきねん
する。その日のくれは、ひかし山きよみつにさんろうして、
このよしをいのれは、くわんおんの御りしやうあらたに
そ侍りける。さくらの花のいつくしく、まことさかり
に見えけるを、もりとをにとて給るを、たきくちゆ
めの心におもふやう、花こそさらによしなけれ、みた
く恋しき人をは夢のうちにも見ぬ事よと、を
もふ心のなさけなく、花ををしおり、ふたひより　」（10オ）
したへすてるとおもひて、ゆめうちさめてなにとな
く、こゝろも空にきよみつをたち出て下向する。や
さかのたうをはひして、きおんとのにまいりつゝ、きせ
ひをふかく申て、長楽寺へさしうつる、ほつせうし、
ほうしやうし、しらかわにかゝりて、をはら、しつはら、さ
しすきて、さかのおくはほうりんし、往生院をは

いてやう〳〵ゆけは、にし山うちすきて、これやこの
北野の天神、こうはいとのゝ名のみのこりて、いまは
なし。ならひの岡のまつの風、きんのねもそれかと　」（10ウ）
心ひかれてなかむれは、まつの木するの藤なみのかゝ
まりゆくにつきても、うら山しくおもへは、そゝろになみ
たとゝまらす、くわうりんしとかきては、うつまさてらと
かや、一むらあるさとをは、なとおほゐとはなつけけん。
かつらの里にてる月は、いつも物うくおほえて鵜舟
にともすかゝりひの、きゆるあとにつきても、ことさら
こゝろほそくして谷のたうみねのたう、摂津のさと
をうちすきて、その日の暮はおとこ山まいりて、
南無やはちまんたいほさつ、こよひのつやのりし　」（11オ）
やうには、たとひちきりはうすくとも、この女房のあり
ところかならすしめし給へとて、かひとくけたつく
しゆしやうこうはちまん大ほさつ、たのもしくそ
思ひける。なひしやうけようのひくわんのかたし
けなきをくわんして、りやうせうしやうのいにしへ、うき
世をいとひ給ひしに、女房おもひにたえかねて、はつ
せの山にこもりて、この人のゆきかたをかならす
しめしたまへと、ほとけにきねん申ける。むかしの人の
こゝろまて、思ひつゝけてわか袖のしほるほとにそ　」（11ウ）
なりにける。まとろむひまのあらはこそ、夢に心も
なくさまん、うつゝすくなく御まゐを、いてゝむなし
くかへりしかは、いつくをたのむかたもなし。こゝやかし
こにやすらひて、里あるところ〳〵のさいけのな
をそたつねける。とはのあたりにたゝすみて、この世
をまつの山のすそ、こひつかといふところに、はにふ
のこやにやとをとり、ふけゆく夜半のなくさ
みに、笛うちふきてありけれは、そこともしらぬ
琴のねのまちかきほとにきゝゆれは、いかなる人　」（12オ）
のひくらんと、つまをとゆかしくきゝけるに、ふつ
てしあなんそんしやのしやうかしたまひしに、かせうは
たつてまひをまひ、たいしゆきんならかるりのこと
をひきけるも、かくやと思ひつゝけて、心をすま
しきく程に、ことのひきよくもおはりぬ。宿のあ
るしの申やう、御みを見たてまつるに、たゝ人ともを
ほえす、いまの笛のいやしきわれらかみゝにたに、
よしあるさまの御笛とうけたまはりて侍るなり。いつ
くの人そととひけれは、つくしのものとこたへける。」（12ウ）
その夜もすてにあけぬれは、あるしのおとこ出あひ、
むかいにみゆるかとのうちは、きやうふさへもんとのとて、
きやうけの人のしゆくしよなり。さへもん殿のこせん
は、かたちもたえにうつくしく、きこゆる琴のしやう
すなり。すきしころ、なにわへのはしのくやうのありし
とき、御ちやうもんのためにとて、くたらせ給ひたり
しに、舟のうちにてひきたまふ琴のつまをと聞
からに、いやしきしつにいたるまて、心ひかるゝふせひ
にて、なかめかちにて侍るとうけたまはると申せは、もり
　」（13オ）
とをきくにあやしくて、くわしくたつねとふ程に、

御としは十八ちゝにおくれ給ひて、はゝこせんはさま
をかへ、にししちてうにましますと、くわしくかたり
けるほとに、このよしをきゝて、琴のつまおとて
の程まきれつへくもなけれは、大菩薩の御
りしやうこれなりけりとよろこひて、やはたのかた
をふしおかみ、いよ〳〵ふかくきせひして、みやこの
かたへのほりける。よしなき事にひかれつゝ、くる
れはとはへそつきにける。月ふけ風すさましき　」（13ウ）
をりふし、琴のひきよくをたち聞、よな〳〵つもる
なけきには、おつるなみたの玉くしけ、ふた月はか
りはへぬれとも、たゝいたつらにすきのかと、あけ暮
をのみ世のなかに、ふるかひもなきあは雪の、きゆ
へきほとにもなりぬれは、谷むらききにはうとく
とも、ゆかりの草をたつねても、なくさめはやと
思ひて、にしの京のほとりに聞しあたりにやす
らひて、そゝろに笛をふくほとに、しかるへきことに
やあはれむ人そありける。いつくの人そととひ　」（14オ）
けれは、いかなるものにて候か、しかるへきところに
ほうこうせんといひけれは、あるしのにこういてあひて、
御身をよく見申は、かたちもたえにいわしく、さき
にきゝし笛のをとも、よにむつましく侍るなり。
さきのよのおやこのちきりはこれなりけりとお
もへは、いまよりは尼かもとにをかんは、いかゝはおもひ
給ふとよし〳〵にのたまへは、もりとをしさひをう
ちきゝて、心をつくす女のはゝのもとゝきくから
にあけくれこゝろにたかわす、おやこのちきりをなし」（14ウ）
つゝ、ほうこうするそあはれなる。かくて日かすをふ
るほとに、とはよりのおとつれのとき〳〵あるを
きゝてこそ、いま一しほものおもひなくさむたくひ
なりけると、あるときうちの尼公のつれ〳〵の
あまりに、とはの御かたに琴をひかせて、殿に笛
をふかせ、思ひ〳〵にきかはやとのたまひて、とはへ
ふみをやられける。女房かしこへくたりぬ。たきくち
こゝをいたしより、あるにもあらぬこゝちして、尼こ
せんおほせありけるは、久しく見たてまつらねは、　」（15オ）
恋しくおもひつるうへ、笛のしやうすの侍れは、琴
ひきたまへとのたまへは、うけたまはると申て、女房
しやうしをへたてゝ、ことをそゆるくひきならす。
もりとをこしたる笛なれは、はむしきてうにより
あわせ、こゝをきはとそふきすます。女房ことを
ひきさして心のうちに思ふやう、ふしきやな、
なにわのはしのくやうのときこそ、かやうの笛をは
聞しかと、心のうちにいかなる物そとありしかは、はしめ
やうをかたりて、いつもこれに候へはそれへもつねに」（15ウ）
めされよ、うけたまわると申て、その日もすてに
暮けれは、女房とはへそかへりける。たきくち、さても
あらねは、なをたち出て恋衣、はる〳〵こしを見を
くり、うちたえかくともいはゝやと、思ふこゝろはつもれ
とも、すたりはてぬる身にあれは、そのかひなくて
さてすきぬ忍ふおもひのくるしさを、とふ人たにも

なみたかわ、そてをしからみせきかねて、かなふへく
も見えされは、尼公このよしあやしくみなして、
いかなることのおこりにか、よのつねのいれひとは　」（16オ）
見たてまつらぬふせひなり。かやうに、たのみたのまれ
て、たかひにおもはん事をは、何かはへたてあるへきと
人をのけてそとひ給ふ。もりとをはつゝむとすれ
ともれにけり。日をまつほとの露の身の、かくて消
なはつみふかし。しらせてこそとおもひては、はしめなにはの
のことのね、ひかれそめける事ともより、きんちう
のほうこうも、さらに物うくありしかは、うわの空なる
思ひを、れいふつれいしやにきせひして、せめてあたり
のゆかしさにそれよりこれにしこうする。すきしころ」（16ウ）
の御出にしやうしをへたてし、わりなさまてこゝろま
よひにかき暮て、いまをかきりのかなしさを、かたり
つらぬることのはを、むすめのうへにきゝなして、おもひ
のほかの事なれは、とかくの返事におよはすして、
尼公はうちへそいりにける。もりとをか心のうち、とふ
につらさのふせひして、いよ〳〵忍ひかねにけり。
かくて、もりとを日にそへてよはりゆくほとに、あ
まこせん心のうちにおもふやう、かくてうきめをみん
事も、ふひんの事なれはとて、わかいたわりにとり　」（17オ）
なして、とはへふみをそやられける。女房いそきき
たりつゝ、尼公いてあひ給へは、御いたはりのよしをこそ
うけたまはりて侍るに、こはいかにとありしかは、しはしは
返事もなくして、よにためしなきまうし事はゝか
りいりて候へとも、人をたすくるならひは、なにかはく
るし侍るへきこそなから、たゝ一め見せさせてたまへと
のたまひて、かのもりとをかありさまをくわしくかたり
たまへは、女房はこれをきゝ、ひとへにみをそうらみ
ける。せんせのしゆくこういかなれはかゝることをは」（17ウ）
聞らんとて、女房さしきをたちけれは、尼公たもとに
とりつきて、みつからおやこのなかなれは、申につけ
て人気なく、よにためしなきはゝかり入てさふらへ
とも、人をたすけんためにこそ、かくとも申いたしたれ。
かなふましくはちからなし。のちは御身とはおやこのむ
つみあるましと、ふけうのことはありしかは、女房せひ
にまよひつゝ、なくよりほかの事そなき。おやの
おほせをそむきて、契りをかれにむすはても、
けにつみふかき事なれは、ふけうのことはおそれ　」（18オ）
つゝ、おやのおほせにしたかひけり。尼公はこれをよろ
こひて、もりとををよひよせて、へたてのしやうし
をあけあわせ、尼公うちへそいり給ふ。たかひにあひ
あふ心のうち、夢にゆめみるこゝちして、はしめなに
わの事ともを、なさけをふかくそかたりける。女房
とき〳〵このよしをきゝても、とかくの返事に
およはす、きぬひきかつきてなくよりほかの事
そなき。そのときもりとを、いかにやきこしめせ、
なにわにて御すかたをくもゐの月のことくにて、　」（18ウ）
ほのかにみたてまつりて、心のうちのくるしさをつま
はやまともなりぬへし。うつまいなとやわたつうみ、

はてしなくともうめさるへき、この事むなしくなる
ならは、しやうたう一ひやくこうのしやしんのこうをへて、
つるきの山をおりのほらん事のかなしさよ。又御こと
もいくつの年のなんとき、さへもんのせうのつまと
なり。又いくつのとしのいつよりも、もりとをかふさひ
となるへしと、かねてよりもひもんのふたにつけて
こそ侍るらめ。されはいとふともいとはれし、けつるとも
」（19オ）
けつられし、なさけのみちをしる人も、よにためしある
物をきみもつふさにきこしめせ、なりひらの中将は、
あねになさけをこめてこそ、くりはらやあねはの松
とよみてより、うたのたひともなりしなり。けんしの
大しやうは、おはになさけをこめてこそ、さらしなやおは
すて山ともよみしなり。いつみしきふは、たうめいにな
れそめてしほのひるまのつれ〳〵に、なに物そと
とひけれは、五てうのはしつめのすて子なりといひけ
れは、いつみ式部はこれを聞すてけんときのありさまを
」（19ウ）
くわしくたつねとふほとに、うふきぬのかたはしにむ
つせなりしやと、かきてありしとかたれは、うたかひところ
なく、けんさいの子にてあるよとおもひて、おやこのかひ
をはしりけれとも、なをなつかしさまさりつゝ、ちきり
こめしふうふのみちなり。されは、おんなとなり、おとこ
のけねんかゝらぬを、はしたなきしやしんとて、ちく
しやうにたとへて、人のれつにはあらさるなり。山とな
りて、きりかすみのかゝらぬ山や侍るへき。又はんし
やく岩はかたしとは申せとも、雨つゆかさなれはしる」（20オ）
しもありてこけもむす、られうのたもとはかさぬる
にしたかひて、なつかしさますとかや、たつせ川のすみ
は、するにしたかひて色ふかし。つのくにやなにはの
あしのねにふして、みちのくや忍ふのさとのすり衣、
きつゝなれなはいかはかり、われもうれしとおもわん
とかきくときいひけれは、女房あわれにきゝなして、
とき〳〵返事するほとに、なをゆくすゑの事まて
もたのめをかんとせしほとに、うけひくけしきのな
かりしに、かさねてとかくいひけれは、せんかたなさのあ
」（20ウ）
まりにや、ひとりにたのみのまれて、又ことさまの
ふるまひは思ひもより侍らす。あからさまのけんさんも
おもひのほかのことなれとも、我うきさまをも御らん
せは、御おもひもややみなましと思ひ侍りけれはこそ、
これまてもまいりてさふらへ、まめやかにさやうの事
にて候はゝ、たのみつるものにもいとまをこひてといひ
けれは、もりとをもちひかたくして、しひてまことを
いひけれは、女房こゝろにおもふやう、いはきのことくて
さてはては、おやの心にたかふへし、ちきりをかれに」（21オ）
むすひなは、ていちよのほうにもれぬへし。ふたつの
みちをとにかくに、身をなきものになしはてゝ、おと
このいのちにかわらんと、ふかくそ思ひさためける。
いとまのこともかなはすは、たのみ侍る我つまをうしな

ひたまひてさふらはゝ、うちたへひたすらにしたかひま
いらせん。いかゝはおほしめさるゝと、うちとけたるけしき
にて、くわしくかたりけるほとに、もりとをはこれをき
きうつへきしたひを、いかにとしてかととひしかは、とは
の宿所のありさまをくわしくかたりをしへつゝ、まつ」（21ウ）
へきよしをちきりては、やかてとはへかへりける。
あしたのとこにおきゐつゝ、とまらぬけさのきぬ〳〵
にむなしき空をなかめつゝ、その日をまつこそ久
しけれ。すてにそのよにもなりしかは、さへもんのせう
のもとへは京よりまれ人きたりつゝ、一日しゆゑんを
くらすまに、女房はありし所にうつりゐて、けふを
かきりの事なれは、心にうかふもしほ草、なみたな
からにかきあつめ、日ころてなれし物なれは、さいき
のことをひくよりも、袖のうへゆくなみたかわ、し」（22オ）
つみはてなんみののちを、思ふこゝろつくしにこ
かれてのみこそかなしけれ。せきやうにしにかたふけ
は、みやこの人もかへりける。さへもんのせうはうちへいり、
けふはなにとやらん、いつよりもへんしもはなれ
かたきに、おりふしまれ人きたりて、思ひのほかにとい
ひけれは、心つよくはしのへとも、おつるなみたにむ
せひつゝ、わらわもまきらかすかほに袖をあてけれ
は、このよしさへもん見るよりもうちわらひ、おんない
はかなきふせひかな、見えたる事もなきにさへ、けし」（22ウ）
からすさよといふときそ、いとゝなみたはすゝみける。
さへもんとのゝ御くしにほこりのかゝりて侍るに、かみを
けつれといひけれは、御まゑの女房、ときみたす
なこりのためとやおもひける。みつからよりてけつり
しか、おつるなみたのかきくれて、くしのたてともみ
えわかす。めのとをよひてけつらする。又たちより
て夜もすから、そのうは玉のくろかみをやゝ久
しくかきなてゝ、まとろむほとをまつほとに、せん
こもしらすそふしにける。いまはとおもひけるほとに」（23オ）
かつらにかみをとりくして、もとゆひすそへおしさけ
て、まくらのほとにをしいたす。そのゝち、二さいにな
りにけるを見るよと思ひしに、なみたやいたくこ
ほれけん。又おもてをもむけすして、めのとにい
たきとらせつゝ、さても日ころはいたわしく、ちりた
にもふれさりける、ひすひのかんさしのたけにあま
りたるを、てつからこれををしきりて、かきをくふみに
そへつゝ、しやうしのうちにそをきたりける。のこれる
かみをとりあけて、おとこのえほしをおし入て、おふ」（23ウ）
くちたわやかにきなして、いまや〳〵とまちたりける
心のうちこそかなしけれ。やう〳〵ときもうつり
て、やくそくのほとになりしかは、もりとをうちを
こゝろさし、忍ひいりて見れは、しとみやりとの
かけかねもかけさりけるほとに、いよ〳〵すゑも
たのもしく、うれしさたくひもなくして、こしのかた
なをぬきもちて、ひやうふひそかにをしのけて、
枕ほとをさくりしに、ふうふ二人のかたちあり。え
ほしおふくちさくりわけ、いまわと思ふところにさす」（24オ）

かおんなの身なれは、おそろしくやおもひけん、すこしはたらくやうなるを、おとこのをくるとこゝろへて、むねのあひたにのりかゝり、たゝみいたしきとをれ〳〵と三かたなさひて、そのゝちかへすかたなにくひをとり、ほんくわひとけぬとよろこひて、かとよりほかへはしりゐて、みちのほとりのたのなかへ、くひをはふかくかくしつゝ、京へいそきのほりける。これをは夢にもしらすして、さへもんのせうはうたれぬと、とはよりいまやつくるとまちける心のうちそ　」（24ウ）

おかしき。夜もすてにふけゆけは、さへもんのせうねさめして、女房おとろきたまへとて、さうのわきをさくりしに、ひたりのわきにふしにけり。あやしきさまにさくりなし、人やあるといひしかは、うちよりしそくをいたしける。くひなき物に見なしつゝ、きもたましひも身にそわす、あきれまとへるさまは、けにあわれにそおほえける。おなしみちにとかなしみて、しかひをせんと、かなしみしける人おほけれは、さへられてむなしきしかひにとりつきて、こゑをあけてなき　」（25オ）

なけく。せめてかたきをしるならは、せんきまんきにむかひても、しなんいのちはをしからすとて、ふししつみてそゐたりける。この女房のありさま、たゝ事ともおほえすとて、日ころてなれしところのしやうしのうちを見けれは、かきをく文とくろかみとふたつのかたみをとりいたす。なく〳〵ひろけてよみけれは、うわの空なるあた人のかされることはにとりなして、うつろひやすき花かつら、心かけとちきりしを、思ひもよらぬ青柳の、いとさりかた　」（25ウ）

き事なれは、御いのちにはかわりぬ。おさあひものゝゆくすゑに、我のちのよをとふらへと、ふてもしとろにかきなして、いもせはにせの契りとたのめをかくる事まても、さま〳〵くわしくかきをきけり。その夜もすてにあけしかは、京へもかくとつけにける。尼公はかなしさ身にあまり、いそきとはへそくたりける。もりとをともにゆきけるか、けろうのつかいしたるほと、いひかひなきものにもあらし。さへもんのせうといひけるを、聞たかへてそあるらんと　」（26オ）

心のうちにおかしくて、こへゆきつきしかは、尼公はうちへいり給ふ。むなしきしかひにとりかゝり、こゑをあけてなきなけく。そのときあやしくきゝなして、いそき路たうへはしりいて、をきつるくひをみてあれは、とし月こゝろつくしける女房のくひにてありけれは、さてはおとこのいのちにかわりけるよとうち思ひ、たち所にたれをふし、しかひをせんとしけるか、心にかくしておもふやう、とてもむなしくなるならは、かのさへもん殿のてにかゝり、ともかくもとおもひて」（26ウ）

むなしきくひをとりあけて、たもとのしたにかくしつゝ、かしこへとてそかへる。いかにやさへもんとのさこそは思ひ給ふらめ、御ふんをうちてそのゝちは、うちたへあらんとありしを、もりとをまことゝおもひて、こよひこれにきたりて、御へんくひとこゝろへてとりつる

くひは女房のくひなり。御へんのいのちにかわらん
と思ひけるをしらすして、こよひこれにきたりつ
つ、せんひくたきてかひなし。しかしなからもりとをを
御へんのてにかけたまへ、なをしもうちたへちきらぬ」（27オ）
われらたにも、いのちにかへてかなしきに、ましてやまう
さんかひろうとうけつのちきり、へんしもたちわか
れさる、御へんの心のうち、さこそはかなしかるらめ、と
もかくもわれらをはからせたまへ、むなしきくひを
とりいたす。さへもんとのをはしめとして、あつまりゐ
たる人々みな一たうにこゑをあけ、いま一しほそなき
なけきける。さて、さへもんこしのかたなをぬきもちて、
ひたりのてにては、たきくちをおさへて、すてにくひ
をかゝんとす。ひきあをのけて見てあれは、二十は　」（27ウ）
かりのわかきもの、きりやう事さらいさきよく
いのちをおしむけしきもなし。せんきまんきをこゝろ
しても、いまのおもひにくらふれは、なか〳〵ものゝかす
ならす、この物をころしても、しやうりやうないりのく
けんをおもひやるこそかなしけれ。ひとへにたすけ
申すへし。これをしゆつりのはしめとして、御へん
ももとゆひきりたまへ、われらももとゝりきるへし
とて、さま〳〵くわしくかたりしか、やかてもとゝり
きりけれは、もりとをもおなしさまにそなりにけ　」（28オ）
る。かいのししやうをたつねつゝ、しゆつけをとけて
さへもんはもんしやうはうと申なり。もりとをは
もんかくと申て、たかおのてらにのほりて、おこなひ
すまして、ゐたりけるをこそ、ふつほうのいにしへを
はゐんやうのふたつにかたとり、てんちのにしもおな
しく、又三かひもかくのことし。ふもおんはうによ
せんほう、ひもおんしんによたひかい、これみなゐんやう
のもとひとせり。よしなき恋のおわりこそ、しゆ
つりのはしめとなり侍りける。これをはいけん　」（28ウ）
の人々は、ねんふつ十へんつゝ御ゐかうあるへし。」（29オ）